

一般公開 始まる



旧閑院宮邸庭園整備さる

現在、京都市上京区の京都御苑内にある閑院宮邸跡の庭園が整備を終え、一般に公開されている。

東山天皇の皇子である直仁親王を始祖とする閑院宮家は、伏見宮家・桂宮家・有栖川宮家と並ぶ四親王家の一つであった。創立は宝永7年(1710)。明治10年には東京に転居し、第7代純仁氏が昭和63年に逝去し、閑院宮家は絶家となった。閑院宮邸は創設時より2度の大火に見舞われ、そのつど建物は建替えられ庭園もそれに応じて造り替えが行われてきた。現在の敷地は、大内保存事業や大正大礼などの影響により当初の3分の2程度となっている。閑院宮邸跡の庭園は、「公家町遺跡」と称される周知の埋蔵文化財包蔵地であり、庭園の修復方針を定めるために発掘調査が行われた。

その結果、園池護岸は数度の改変を受け、南側からは

作庭当初のものと思われる拳代の鴨川の玉石が貼り付けられた州浜及びそれに対応した北岸が園池底から検出された。現在の北岸は御苑の調整池・防火用水として明治時代に広げられたものとみられている。また、北岸部分が広げられた時期と当時の水位は異なっており、地盤も大内保存事業や火災による再造成を受けて当初よりも大きく盛土が施されていた。そのため当初の地形を基本とした整備ではなく、遺構保存という見地から遺構面を埋め戻し保存した上で、土や石灰などを用い、当時の技法を考慮した復元が行われている。なお地上部は発掘調査による所見等、復元の根拠が乏しく、意匠を明確にすることができなかったため、歴史の変遷と新たな整備とが後世に誤解を招かないようにとの配慮から、一面芝生が施されている。〈第2面に関連記事〉 (吉村龍二)

予告 平成 18 年度日本庭園学会関西大会

京都 12 月 9 日、10 日

本年度の関西大会は平成 18 年 12 月 9 日（土）と 10 日（日）に行われることとなった。9 日は見学会であり午後からの開始となる。10 日は、午前中が公開シンポジウムで、午後からは研究発表大会となる。シンポジウムと研究発表会の会場は、京都御苑にほど近い「レジーナ京都」に決まった。9 日の見学会終了後は、四条河原町周辺で懇親会を開催する予定となっている。

絡提携および促進をより積極的にはかるために、これまで関西大会で中心的に議論されてきた庭園学と考古学の連絡提携に加え、地理学、民俗学などの学術分野から庭に関する情報提供を頂き、それを題材にパネルディスカッションでは多角的な視野で庭園を眺めていく。話題提供者は、河原典史氏（立命館大学助教授）、村上忠喜氏（京都市文化財保護課）福原成雄氏（大阪芸術大学教授）らを予定している。シンポジウムのプログラム等は次号の学会ニュースにて発表する。

京の宮家・門跡寺院の庭を巡る

■京の宮家・門跡寺院の庭

見学会のテーマは、「江戸時代の宮家と門跡寺院の庭園を巡る」に決まった。京都では、明治期当初の天皇の東幸により、多くの宮家が東京に移住した為、御所周辺は僅かの期間に荒廃した。現在の京都御苑は、その荒廃した公家町が大内保存事業が行われた区域であり、現在でもわずかに公家邸の遺構が残る。なかには今もなお庭園が存在するところがあり、一部では整備がなされている。また、京都には皇族・宮家と密接に関わる門跡寺院が数多くあり、そのうちには庭園を有するものもある。本見学会では、宮家と門跡寺院との関係を辿り、その世界観と庭園の関連性を巡る。

予定では、京都御苑（京都市中京区）に残る九条邸跡庭園及び捨翠亭・近衛邸跡・現在環境省京都御苑管理事務所の敷地内にある旧閑院宮邸の邸宅と庭園等、宮家跡と近隣の門跡寺院の庭園を訪ねる。特に注目されるのは、第 1 面でも紹介した閑院宮邸跡であり、整備内容について設計監理と発掘調査の担当者から講義が行われる。

集合場所及び時間は、京都御苑北西側の今出川御門前に午後 1 時の予定。詳細は次号の学会ニュースにて。

日本庭園を巡る最前線 2006

今回の公開シンポジウムは「庭園を巡る最前線 2006」と題して、日本庭園とそれにかかわる研究の連

研究発表会 原稿募集！

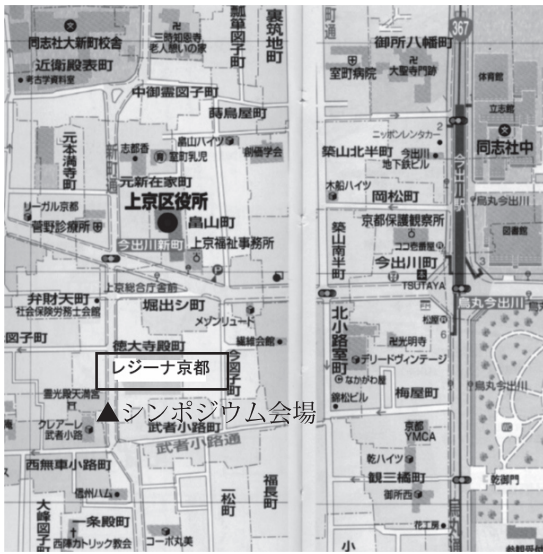
このところ盛況をみせている研究発表会。前回の全国大会では 7 件の発表があった。発表者もベテランの教授から、大学教員、行政職員、学生と幅広く、テーマも平安時代から近代までと多様になってきている。

また、学会誌 14・15 合併号からシンポジウム資料と研究発表要旨が学会誌に掲載されることになり、これまで以上に発表内容の充実が求められており、発表者の真剣度も増している。

発表の希望者は、来る平成 18 年 10 月 27 日（金）までに発表者名、題名、概要（200 文字程度）、発表時に使用を希望する機器類、連絡先を明記し、関西支部事務局まで送付されたい。なお送付先の住所等は第 8 面の末項を参照のこと。発表原稿の提出締め切りは、11 月 20 日（月）。原稿の分量は、2 ページ、4 ページまたは 6 ページで、1 ページあたりの文字数は 2,000 字となっている（図・表・写真を含む）。原稿はそのまま版下として印刷するため、出来る限りワードプロセッサの使用して作成されたい。レイアウトは、学会誌の掲載論文等に準じ、横書き 2 段組、1 段当たり 25 字 40 行。

発表時間は 20 分、質疑 5 分を予定。スライド、パワーポイントの使用が可能。

提出された発表要旨は、全発表者分をまとめて、資料集とし発表会で配布される。なお、先にも触れたように、この発表要旨は、先に刊行される学会誌に「研究発表論文」として掲載される予定となっている。発表の概要は次号（No.53）に掲載する。



見学会案内 「城之越遺跡」

平成 18 年度の第 3 回現地見学会は城之越遺跡にて開催されることになった。開催日時は、平成 18 年 11 月 11 日（土）午後 1 時 30 分から。場所は城之越遺跡（三重県伊賀市比土地内）の現地となっている。講師には、奈良文化財研究所の高瀬要一氏を招いている。城之越遺跡は、伊賀市域の最南部木津川上流右岸の丘陵麓の水田において、古墳時代前期（4 世紀後半）に属する集落とそれに伴う大溝（幅約 5m）の遺構が検出された。集落は大溝を中心に竪穴式住居跡と小倉庫群で構成されている。大溝は湾曲し護岸には石貼が施されている。なお、参加費は 300 円（資料館入館料他）。

▼参加申し込み先 澤田庭園研究所気付 日本庭園学会
見学会委員会（担当：澤田天瑞）
〒462-0847 名古屋市北区金城 4-7-7（ハガキにて）

研究会・シンポジウム案内

今月開催される「日比谷公園ガーデニングショー 2006」では、本学会主催で公開講演会を開催することとなった。講師は、河原武敏氏（元東京農業大学教授・農学博士）で、テーマは「遠州流一戒の作庭伝承（1）」である。概要は下記の通り。

江戸初期の著名な作庭家小堀遠州の没後まもなく、公卿で僧侶の一戒（いっせい）はその作庭法に傾倒し、有栖川宮幸仁親王の支援をうけ、その内容を教程に整理して、遠州流の名のもとに、現在まで 17 代 270 年間の長きにわたって継承されている。公開された秘伝書は初伝・中伝・奥伝・皆伝・匠師の巻に分割され、代々の匠師達の加筆があり、内容全体が分り難いという。今回の発表では作庭の組織、設計法、施工法に分類し条文が解説され、流派の伝承と作庭組織の特徴について講演される。中級武士で風流人であった当流の匠師達が江戸時代の武家屋敷などをどのように作庭していたかが分り興味深いものとなる。

日時は、平成 18 年 10 月 26 日（木）の 13:30 から 15:00。場所は、日比谷公園「緑と水」の市民カレッジ（〒100-0012 東京都千代田区日比谷公園 1-5）。参加費は無料となっており、直接上記の会場にお越し頂きたい。

▼問合わせ先 日比谷公園ガーデニングショー 2006
実行委員会事務局 TEL03-3267-4855

京の文化財探訪 秋の文化財特別公開



京都市指定名勝 立本寺庭園

京都市文化観光資源保護財団では毎年、春と秋に文化財の特別公開を行っている。今回は、近世中期の日蓮宗本山としての寺観を伝え、文化財建造物、障壁画、庭園を有する立本寺と、江戸時代創建時の門跡尼寺の格式と景観を伝える霊鑑寺が公開される。公開期間は、立本寺（京都市上京区七本松通仁和寺街道上る一番町）が平成 18 年 10 月 28 日（土）から 11 月 5 日（日）まで、霊鑑寺（京都市左京区鹿ヶ谷御所の段町）が 18 年 11 月 22 日（水）から 11 月 26 日（日）となっている。各寺院とも公開時間は午前 10 時から午後 4 時で、受付時間は午後 3 時 30 分まで。参観費は 500 円。

▼問合わせ先（財）京都市文化観光資源保護財団
TEL(075)752-0236

東京都3歴史館共同企画 徳川御三家の実態と庭園

新宿歴史博物館・千代田区立四番町歴史民俗資料館・文京ふるさと歴史館では、3館共同企画の展示会として平成18年10月21日(土)から12月3日(日)まで、「徳川御三家 江戸屋敷発掘物語」が開催される。

「御三家」とは、徳川家康の11人いた男子のうち九男義直(尾張家)、十男頼宣(紀伊家)、十一男頼房(水戸家)を始祖とする3家を称し、将軍家に世継ぎがない時に備え、将軍職を継承する役割を担っていたといわれる。御三家の江戸屋敷は、江戸初期にはいずれも江戸城半蔵門内にあったが、その後明暦の大火を契機に、尾張家は市谷御門外(現在の防衛庁)、紀伊家は赤坂御門内(現在の紀尾井町)に移転後さらに赤坂御門外(現在の赤坂御用地・迎賓館一体)に、水戸家は小石川御門外(現在の後樂園・東京ドーム一带)に屋敷を拝領された。

近年、これら御三家の屋敷跡の発掘調査によって、その邸宅や庭園、あるいは生活の様子など、絵図や文書からではわからない事柄が次第に明らかになってきた。展示では、発掘調査によって明らかになった屋敷内の施設や、そこで使われた道具類を中心に、絵図などの歴史資料を交えながら、御三家の江戸屋敷に住んだ人々の暮らしが紹介される。今回の展示では、御三家の各家のうち、尾張徳川家を新宿歴史博物館(新宿区三栄町22)、紀伊徳川家を千代田区立四番町歴史民俗資料館(千代田区四番町1)、水戸徳川家を文京ふるさと歴史館(文京区本郷4-9-29)が担当し、それぞれの独自性を鑑みながら「徳川御三家」の江戸屋敷の実態に迫る。

開催期中は、関連イベントとして後援会や見学会、スタンプラリーなどが行われる。本会からは、藤井英二郎氏(千葉大学教授)が「小石川後樂園の庭園構成」と題して講演会を行う予定。日時は平成18年11月11日(土)の午後2時から午後4時まで。会場は文京区男女平等センター、定員は100名で事前申し込み制、定員を超えた場合は抽選となっている。参加費は無料。

文京区ふるさと文化館では、六義園周辺と小石川後樂園周辺、旧岩崎邸庭園周辺を対象とした庭園めぐりを開催する予定となっている。日時は六義園周辺が11月16日(木)、小石川後樂園周辺が11月22日(水)、旧岩崎邸庭園周辺が11月29日(水)、いずれも午後1時30分から4時までとなっている。庭園は40名で事前申し込み制、定員を超えた場合は抽選となっている。参加費は保険料実費として40円が必要。



写真：都立庭園案内(財)東京都公園協会発行)より転用

▼問い合わせ先

新宿歴史博物館 TEL (03)3359-2131、千代田区立四番町歴史民俗資料館 TEL (03)3238-1139、文京ふるさと歴史館 TEL (03)3811-7221

新しく指定・登録された文化財庭園 国の登録記念物(名勝地) 相樂園

平成16年5月に行われた文化財保護法の改正により、登録記念物制度が新たに追加された。この制度は主として、一定の価値は認められていても評価が定着していないため現時点では現行の指定制度を適用できないような近代の記念物に関して、適切な保護措置をはかることを目的としている。このたび、平成18年1月26日の官報告示により、名勝地関係の3件が最初の登録記念物となった。そのうち、兵庫県神戸市の「相樂園」は、元は私邸の庭園であったものを公園に改められたものである。相樂園は神戸の資産家小寺泰次郎の邸宅に造られた庭園であったが、昭和16年(1931)に神戸市の所有となった。園池に面して姫路から移築された船屋形(重要文化財)があり、ソテツ山や大型の燈籠などが特徴的な庭園であり、一般公開も行われている。



写真：<http://www.sorakuen.com/shisetsu/funeyakata.html>より転用

平成 18 年度 通常総会開催報告

去る平成 18 年 6 月 3 日（土）に全国大会の興奮冷めやらぬ新宿御苑レクチャールームにて、平成 18 年度の通常総会が開催された。以下、平成 17 年度の会務及び活動報告を抜粋して報告する。

平成 17 年度収支決算報告および監査報告については、報告の後、高橋幹事の代理として石井匡志から、適正なる処理であったことの確認報告があり、承認された。

学会賞の規定等については、若干の修正を前提に原案通り承認された。

役員の改選については、平成 18・19 年度の役員について、監事および理事の案、学会ニュース刊行委員を廃して広報委員会を新設すること、10 周年記念事業委員会は前期と同様とするという案が提案され、原案通り承認された。なお、新しい会長、副会長、各委員会担当については、出席していた新理事の数が理事会開催の定足数を満たしていなかったため、後日、理事会を開催し選出することになった。その詳細については、次号の本紙にて報告する。

関西大会は 12 月初旬に京都市内で開催の予定、見学会は興禅寺庭園と城之越遺跡、中壱邸庭園、皇居参観を予定しており、研究会・シンポジウムは関西大会のシンポジウムを関西大会実行委員会と共催すること、例会（現地研究会）を開催予定であることがそれぞれ提案された。学会誌の刊行については、学会誌 16 号（2005 関西大会の研究発表要旨他掲載）と 17 号（2006 年度大会の研究発表要旨他掲載）を発行予定であること、学会ニュースについては平成 18 年度内に 50～54 号を発行するものとし、学会ニュース刊行委員会から広報委員会となったことから、学会のホームページ更新と見学会やシンポジウム等といった学会事業の広報、学会の普及および会員募集を委員会の活動内容とすることが、それぞれ提案された。なお、今回決定した 18・19 年度の役員は、以下の通り。なお、太字は新任を示している。

■役員

顧問	伊藤 鄭爾	
監事	前田 宗正	
	高橋 一輔	
理事	浅野 二郎	足立 佳代
	粟野 隆	市川 秀和

理事	井上 元	今江 秀史
	牛川 喜幸	大澤 伸啓
	小野 健吉	加藤 元信
	河原 武敏	佐々木邦博
	澤田 天瑞	吹田 直子
	菅沼 裕	杉本 宏
	鈴木 久雄	鈴木 誠
	谷川 章雄	玉井 哲雄
	仲 隆裕	中島 宏
	中根 史郎	中村 昌生
	野村 勘治	藤井英二郎
	古谷 勝則	前田 義明
	三島 孔明	宮内 泰之

■委員会

10 周年記念事業委員会

委員長	浅野二郎	
副委員長	中島 宏	河原 武敏

10 周年記念事業事典編纂委員会

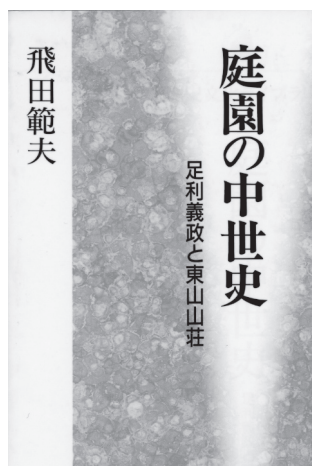
委員長	浅野二郎	
副委員長	牛川喜幸	
委員	中村昌生	岩田勝之助
	前田宗正	中村静夫
	鈴木久男	藤井英二郎
	中島 宏	河原武敏

10 周年記念事業事典編纂実行委員会

委員長	浅野二郎	
副委員長	牛川喜幸	中島 宏
委員	井上 元	今江秀史
	大澤伸啓	小口健蔵
	小口基實	小野健吉
	金 眞成	佐々木邦博
	高瀬要一	田川国男
	高橋一輔	多々良美春
	戸田芳樹	仲 隆裕
	中根史郎	藤井英二郎
	前田義明	宮内 泰之

図書紹介

『庭園の中世史 足利義政と東山山荘
(歴史文化ライブラリー)』
(飛田範夫, 吉川弘文館, 2006.3)



中世の庭園に関しては、故外山英策著『室町時代庭園史』(思文閣, 1933)という名著がある。それ以外に中世の庭園を主体的に取り上げた著作は数少ない。

文献資料が少ないのは平安時代以前の庭園についても同じであるが、こちらは近年埋蔵文化財の発掘調査によって多くの庭園遺構が検出されており、年々その実像が詳しく知られるようになってきている。中世の庭園に関しては、現存している事例が比較的多い一方、その殆どが最初の庭造り以降、様々な変遷を経ている。現存の庭園を取り壊してまで発掘調査を行うこともできないので、その後の用途変更に併せてどのように庭園が作り替えられ、建物配置が変わったのかを辿ることは極めて難しい。

庭園が現存していることがかえって中世の庭園の理解を難しくしているという側面もある。著名な銀閣寺の庭園は元来寺院に相応しいものとして造られたものではなく、足利義政の閑居として造営された東山殿を前身としているのは自明の事実である。しかし眼前の庭園の印象が強烈すぎて、義政が造ろうとした庭園の世界観を復元的に想像するのが極めて難しく、当時どのような用途や思想に基づいて造られたかを今の庭園から読み取るとは、ほとんどできなくなっている。

飛田氏は、こうした中世の庭園の理解をめぐる困難な状況に対し、数多くの文献資料に基づいて、義政をいわば主人公にして具体性を与えようとしている。これから室町時代の庭園の研究をしようとしている人には、お薦めの一冊である。(今江秀史)

インタビュー企画

学 び の 庭

第1回 民俗学

本号から始まった本コーナーは、毎回異なる学術分野の方をお招きし、庭に対する印象やその可能性について行話題提供を頂くという企画。

第1回は、民俗学からの話題提供として京都市文化財保護課の技師、村上忠喜氏に話を聞いた。村上氏は、祇園祭をはじめとする京都の様々な民俗文化財の保護行政に携わっておられる。

編集部(以下、編) 今回、当学会の関西大会のシンポジウムにて話題提供を頂く予定となっていますが、庭に対する率直な印象はどのようなものですか。

村上氏(以下、村上) 思い浮かぶのは名園といった程度で、特段意識することはないですね。

編 文化財保護課には、同僚に庭園に携わる担当もいますが。

村上 特に意識していません。今回も頼まれたので、いわば義理でやっているようなものですし(笑)

編 とはいうものの、これまで書かれている論文の中には、庭園学の立場からすれば、庭のことを書かれているような側面も感じられますが。

村上 それはあくまでも庭のことを意識しているというよりも、生活習慣からみた町家の空間利用について考えたということです。うなぎの寝床と呼ばれる京都の町家(京町家)には、キーワードとしてオクとウラがあります。京町家は街路から見て2つの軸があって、オク軸については伸縮する軸であるという仮説を提示しました。

編 オクとウラとの違いは何ですか？

村上 オモテからウラに向かっては日常的な生活空間の連続体であり、オモテからオク軸というの本来は日常的空间が、非日常時に伸縮する空間性といえます。つまり結果的に、そのオモテからオク軸に庭が組み込まれているということもできます。

編 京町家における非日常性といえば、やはり祇園祭でしょうか？

村上 そうなります。民俗学に携わっているので、元来から屋敷地というものに興味がありました。当然、それには庭が含まれます。ましてや民俗語彙(フォークターム)には、ハシリニワ、ミセニワ、トオリニワ、カマド

ニワ、あるいはツボ、オクニワ、ナカニワといったいわゆる町家の庭の語があり、農村の庭であればマエニワ、カドニワ、ナカニワ、ウラニワといったものがあります。さらにいえば漁業集落にもナカニワ、ウラニワ、ハマなどがあります。こうした生活空間には以前から注目していました。

編 民俗語彙の中にそれほど庭に関する言葉があることは興味深いですね。ところでハマは庭なのですか？

村上 例えば最近伝統的建造物群保存地区に指定された伊根町の漁村では、現在、浜側と丘陵側との間にバス通りがあり、双方の側に家が造られています。この相対する浜側と丘陵側の家の表札をみると、実は同じ家なのです。かつて自動車がなかった時代は、海側から順に浜、舟屋、作業スペース、母屋、畑そして丘陵（山）がありました。つまり浜に対して短冊形の地割りが形成されていたのです。それがモータリゼーションの影響で、道路を通す必要が生じ、中庭の部分がつぶされたのです。これは言い換えると、道路が通せるくらい集落が画一的な配置であったということです。ちなみにかつては浜が生活道路であり、同時に浜は集落の共同作業を行う庭として使われていました。

編 それは実に興味深いですね。

村上 正直言って従来、こうした空間を庭とは考えていませんでした。確かに民俗語彙としても「ニワ」という語が付いているので、関連性があるのかもしれませんが、もう少し集落の庭について簡単にご紹介しましょう。まずは農業集落から。これは柳田国男も言っていることですが、東日本の農家はマエニワが広く西日本は相対的に狭い。これはなぜかといえば、稲干しをしたり脱穀をしたりという農作業は、東日本では各家の庭に取り込まれて行われ、西日本は稲刈りをした後の田地で行われているからといわれています。したがって東日本の屋敷地の前庭は広く集落が粗密であるのに対し、西日本では過密になっているのです。このように集落の形態には、生活・社会構造が強く結びついているのです。

編 なるほど。

村上 冒頭に話したことに戻りますが、これまで庭といえば趣味的・文化的な空間として考えており、民俗語彙における庭は生活に密着した場所としてトータルなものとしてとらえてきました。だからいわゆる名園と呼ばれる庭と民俗語彙における庭を同じようなものとは考えてきませんでしたね。民俗学で研究されている庶民の集落

における庭が、どのように特化した名園と呼ばれる庭に発展していったかについては、民俗学においても研究する意義があるかもしれませんね。少なくともこれまでそのような視点での研究はなされてないと思います。

編 では、庭園学でも民俗語彙を検討し、庭の段階的な発展を考察する上で注意すべきは、どのような点でしょうか？

村上 地域差と生業の違いを踏まえて、庭の歴史的な変遷過程をみることで、新しい知見がえられるのかもしれませんが、よくはわかりませんね。

編 ありがとうございます。

(平成 18 年 9 月 28 日)

インタビュアー：今江秀史

□話題提供者プロフィール

村上忠喜（むらかみ ただよし）

1960 年 京都府生まれ

経歴

1984 同志社大学文学部文化学科卒業

1991 佛教大学文学研究科博士課程満期修了

1991～1994 JT 中南米学術調査プロジェクト研究員

1996 京都市文化財保護課採用

現在に至る

専門

日本民俗学（都市研究）

中米民族学

論文

1997, 「グアテマラ高地マヤの定期市と村落」（『グアテマラ中部・南部における民俗学調査報告書 1991～1994』, たばこと塩の博物館）

2000, 「みやこのフォークロア」（八木透編『フィールドからの民俗学』, 昭和堂）

■募 集

インタビュー企画「学びの庭」では、これから様々な学術分野の方をお招きし、庭に関する意見や見識を拝聴していきます。自薦・他薦及び地域は問いませんので、この人をという方をご推薦下さい。応募は日本庭園学会広報委員会まで、よろしくお願ひします。

雑誌紹介**「月刊文化財 (511号)」**

(文化庁文化財部監修, 第一法規株式会社, 2006.4.1)

最新の文化財行政の動きを詳細に伝える「月刊文化財」の511号では、「庭園の保護」が特集された。以下、特集記事の項目を紹介する。

- ・名勝としての庭園および公園の保護
本中 眞
- ・日本人の美意識—庭園に表現された自然観—
吉田 博宣
- ・庭園の美—その保護のために
尼崎 博正
- ・城下町に残る庭園の保全を目指して
佐々木 邦博
- ・近代の公園の保護
丸山 宏
- ・歴史的庭園の保存管理における視点と方策
平澤 毅
- ・文化財庭園の保存管理技術をめぐって—文化財庭園保存技術者協議会の試み—
仲 隆裕
- ・史跡及び名勝平等院庭園の整備
杉本 宏
- ・東京都における文化財庭園の保存管理計画
高遠 達也

■学会員の募集

日本庭園学会では学会員を募集しています。当会のホームページ (<http://www.soc.nacsis.ac.jp/asjg/>) をご覧の上、入会フォームを印刷の上、FAXでご応募下さい。

北陸での庭園見学会の立ち上げ

このたび、福井県金沢市を拠点とした民間の庭園見学会「樹仙堂庭園見学会友の会」の立ち上げがあり、去る8月6日福井県の一乗谷朝倉氏館跡の庭園、城福寺庭園、三国・滝谷寺庭園にて、第1回見学会が行われた。この

会は、造園の設計・施工を行う(有)丸岡樹仙堂が主催するもので、北陸に置ける庭園文化の向上を目指している。単に庭を見て廻るだけではなく、バスなどでの移動時間を利用して参加者間の交流が図られる。当会からは澤田天瑞氏、河原武敏氏が協力している。

▼連絡先 (有)丸岡樹仙堂 〒921-8033 金沢市寺町3-12-12 FAX/TEL (076)241-2650

■編集後記

本年度通常総会で広報委員会が新設され、本号から「学会ニュース」をリニューアルいたしました。学会の行事案内だけではなく、日本庭園をめぐるさまざまな情報を掲載していきます。まだまだ読み応えのある紙面構成にはいたりませんが、徐々に内容の充実をはかっていきます▼「日本庭園学会」の活動を広く社会に発信するため、本誌は学会員だけではなく、大学や研究機関、関係諸団体にもお届けいたします。お読みいただいたご感想、学会へのご意見を広報委員会へお寄せください。原稿の投稿もお待ちいたしています▼当面、学会ニュースの構成は学会関連行事案内・報告のほか、1. 作品紹介(新たに作庭された日本庭園や、修復整備された歴史的庭園)、2. 新指定・登録文化財庭園(国および地方公共団体)紹介、3. 公演・展覧会・特別公開情報、4. 図書情報、5. 人物インタビュー、6. 研究資料解説、7. 庭園用語解説、8. 会員便りなどを予定しています▼学会ニュースとあわせ、学会ホームページもリニューアルを予定しています。こちらはいましばらくお待ちください▼学会ニュースの刊行は、いままで同様な4回です。学会行事の案内は、冬号(2月)で研究大会発表募集、春号(5月)で年次総会案内・研究大会・シンポジウム開催案内、夏号(9月)で関西大会発表募集、秋号(11月)で関西大会案内を行っていく予定です▼なお、ホームページ準備が整うまでメールでの投稿はできません。これまでの投稿先メールアドレスは閉鎖されますのでご注意ください▼今後とも引き続きご支援とご愛読をお願い申し上げます(TN)

■学会ニュースへ投稿は下記日本庭園学会関西支部事務局内の「日本庭園学会広報委員会」宛、関西大会での研究発表大会の申し込みは、「関西大会実行委員会」宛に

お願いします。

〒606-8271 京都市左京区北白川瓜生山2-116 京都造形芸術大学日本庭園研究センター 気付

日本庭園学会関西支部事務局 FAX(075)791-9342